

い〜い湯加減

客「やっと着いた。ほんとの空がみえる安達太良高原か。しばらく、仕事づくめで空なんか見てなかったからな。ほんとかうそかもわかりやしなかったな。よし、ここで羽を伸ばしていくか。出張帰りの途中でそのまま来ちゃったからまずは、宿を決めないとな。ごめんください。」

女将「はい。いらっしゃいませ。」

客「あの、予約してないんですけど今日泊まれますか？」

女将「あーすみません。今日はあいにくご予約のお客様でいっぱいです。」

客「あーそうですか。ありがとうございます。」

客「なんだ、結構、人が来てるんだな。ごめんください。」

主人「はいー。」

客「あの予約してないんですけど今日泊まれますか？」

主人「あっ、はい。お部屋空いてますので大丈夫ですよ。えーっと、足りるかな？」

客「えっ、今日ってそんなにいっぱいなんですか？」

主人「あっ、いえいえお部屋は充分に空いてますのでだいじょうぶですよ！えーと、足りるかな？」

客「空いてないんですか？」

主人「いえいえお部屋は大丈夫ですよ。すみませんお客様、細かいの持ってます？」

客「細かいの？」

主人「ええ、宿泊代が一泊13000円になるのですが、ぴったりありますか？」

客「あっ、そういうこと！あーごめんなさい。あいにく大きいのしかなくて。」

主人「そうですよねー。ちょっとお釣りを切らしてしまっって、細かくなってもいいですか？」

客「ええ、それは勿論かまいませんよ。」

主人「そうですか、すみません。助かります。じゃ、お返しが7000コスモになります。」

客「ちょっとちょっと待って。急に単位が変わったし、減った気がするけど見た目は増えた。なんでですか？コスモって？」

主人「お客さん、岳は初めての方ですね。コスモってのは、以前、この岳温泉は日本から独立してニコニコ共和国だったんです。その時に出来たお金で岳では今でも使えますから安心してください。」

客「不安ですね。不安でしかないですね。分かりました、分かりました。1回考えさせてくださいね。嘘だろ。あんな人生ゲームみたいなお金が使えるわけないだろ。安心できるわけねーだろ。安心って言えるその加減は何なんだ。ごめんください。」

女将「はい。」

客「あの予約してないんですけど今日泊まれますか？」

女将「はい、大丈夫ですよ。お部屋ご用意できます。お客様、岳温泉は初めてですか？」

客「ええ、そうなんです。」

女将「そうですね、ようこそいらっしゃいました。お客様、ここに来る前に鏡が池に寄ってこられました？」

客「え？ああ、池ですか。景色が良かったのでぐるっと回ってきました。二つの池があるんですね。もう一つが緑が池っていうんですか？真ん中で本当に池の色が変わって面白いところですね。」

女将「あー、やっぱり行ってますよね…」

客「え？なにか？」

女将「鏡が池は普通の池なんですけど、緑が池は死の池なんです。理由は分かりませんが、あの池には生き物が住むことが出来ません。みんな死んでしまいます。今までに何人もの人が、あの池に入って命を落としています。だからあのような緑色の怪しい色なのです。あの池の周りには、その魂が沢山残っています。なので不用意に近づくと呪われて。今、あなたの後ろには沢山のその魂が」

客「えっ、マジですか！？そんなこと知らなかったから。どうすればいいですか？」

女将「嘘ですよ！」

客「うそ！なんで急にそんな話したんだよ！こえーな！」

女将「お部屋のほうですが、屋根がなくて空が見えますがよろしいですか？」

客「は？いや、もうそういう冗談はいいですから。」

女将「冗談じゃないんです。この前の強風で屋根が飛んじゃったんです。でもブルーシートを消防士さんが3本のロープでうまく押さえてくれています。よろしいですか？」

客「よろしくねーな。どう考えても。それは、ここで本当に起こったことで、女将に言わないでって言われてたんだからここで言っちゃうのもよろしくねーな。また、お願いします。意味が分かんねー。急に怖い話したり、屋根の部屋だったり話の緩急の付け方加減が凄すぎるな！ごめんください」

主人「いらっしゃいませ。あっ、さっきの、まだお釣りが。」

客「いいです。お釣りコスモで。いいです。大丈夫です。泊めてください。はい、70コスモねありがとうございます。あー、宿決めるのにひとくろうだったな。一旦、腹へったから腹ごしらえするか。ソースかつ丼食おう。ソースかつ丼。ここにくる前に店があった。そこにしよう。」

店「へい、いらっしゃい。なににします？」

客「ソースかつ丼のソースを」

店「へい、ソースかつ丼ソースね。お客さん、初めてだね。腹減ってる？大丈夫？」

客「ええ、腹は減ってますよ。」

店「そう？うちのかつ丼はすごいよ！凄いんだから！そんじょそこらのと一緒にしないでよ。ただ腹減ってるだけじゃ太刀打ちできないよ。死ぬほど腹減ってないと。そんぐらい凄いんだから。見ただけでひっくり返っちゃうよ。大丈夫？うちのかつ丼は かつ丼一杯牛一頭って言われてるからね。うちのかつ丼一杯で、牛一頭分あるってこと。わかる？」

客「はあ、とにかく凄い量だってことは分かりました。でも、それをお願いいたします。」

店「あいよ。」

客「なんかすごいな。そんなに凄い量出てくるのか？腹は減ってるけど大丈夫かな？かつ丼一杯牛一頭か。なんで、豚を牛でたとえるのかな？かつ丼一杯豚一頭じゃだめなのか？そこで、どのくらいの量の加減なのか分からなくなるんだよな。」

店「へい！おまち。ソースかつ丼のソースね。」

客「ありがとうございます。微妙なのが来ちゃったな。多しちゃ多いけど、俺だったらいけそうな量だぞ。なんであんなに無駄にハードルあげたんだろ？ハードル上げすぎだから微妙になっちゃったじゃん。もう少し、加減してあげればいいのに。」

女客「ごちそうさまでした。おいしかったです！凄い量でした。」

店「そうでしょ！1200円ね。」

女客「コスモをお願いします！」

店「コスモ使ってる！本当に使えるのか、コスモ。すごいなコスモ。なんなんだコスモ？とにかくこれ食ってもう温泉はいろろ。は～、いい湯だな。いろいろよくわかんないことあったけど温泉は間違いないな。」

主人「お客さん、いかがですかお湯のほうは？」

客「え～、とってもいいお湯ですよ。」

主人「そうでしょう。岳の温泉は酸性だから飲むとレモンの味がしますよ。肌にもいいですよ。」

客「へ～そうなんですか。レモンの味がする、ほんとかな？あっ！ほんとだレモンの味がする。」

主人「湯加減のほうは大丈夫ですか？」

客「え～、いい湯加減ですよ。調度いいですよ。これならまだまだず～っと入れちゃいますね。」

主人「まだまだず～っと？お客さん、どのくらい入ってますか？」

客「え～、10分ぐらいですかね？」

主人「10分？？こりゃ大変だ。お客さんだめだだめだ、すぐ上がらないと。だから酸が強いつて言ってるでしょ。8分以上入ると体が溶け始めてしまう。緑が池に生き物が住めないのも酸のせいだ。注意書きに書いてあったでしょ。」

客「えっ？そんなの知らないですよ。ちょっとどうすればいいんですか？お湯も飲んじゃったじゃないですか！」

主人「え？飲んだ！どうしてそんな馬鹿なことするんだ！胃が溶けちまう。」

客「だって、あなたがレモンの味がするって言うから。」

主人「レモンの味がするって言っただけで、誰が飲めなんて言った。大変だぞ。」

客「どうすればいいんですかっ??」

主人「とにかく早くこの湯桶を頭の高くまで持ち上げろ！」

客「この湯桶をですか？どうして頭の上まで??」

主人「いいから、死にたくなかったら早くしろ！」

客「分かりましたよ、良いっしょおおおお。これでいいですか??」

主人「あげたか？持ち上げたら、大きな声で湯の神様申し訳ございませんでしたって、大声で謝れ。」

客「湯の神様、申し訳ございませんでした～～～」

主人「嘘だよ」

客「痛い！！アブね！！何するんですか！」

主人「あっはっは！洒落だ洒落だ。」

客「ちょっと、いくら何でも洒落がきつ過ぎますよ。」

主人「悪かった悪かった。ちょっとからかっただけだよ」

客「洒落だって、加減ってもんがあるでしょう。」

主人「そう怒るな、怒るなって。今のでまた汗かいたからひとつ風呂入りたくなっただろ。」

客「いって一な。手加減も考えて下さいよ。もう岳の人たちは加減が分からないんですか！」

主人「そりゃ仕方がない。岳の人はみんな湯と共に暮らしてるからな。」

客「どういうことですか？」

主人「お前、温泉入ってどうだった？」

客「いい湯加減でしたよ。」

主人「だろ？俺たちから湯を取ってみろ。いい加減だ。」